

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520177

研究課題名(和文) 明治期女性教育にみる 知 の継承に関する研究

研究課題名(英文) Research of the history of women's education in the Meiji period

研究代表者

榊原 千鶴 (sakakibara, chizuru)

名古屋大学・男女共同参画室・准教授

研究者番号：50313979

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、明治期の女性教育の内実を明らかにすることである。2010年度～2013年度研究期間中の成果は、1.「知 の継承から考える明治期の女性教育 先駆者の気概に学ぶ」と題した『文部科学教育通信』(ジ アース教育新社)誌上での連載(全14回中、本研究期間分は10回)、2.近代における中世文学の再生に関する論文の執筆、3.1に大幅な加筆を行い『烈女伝 勇気をくれる明治の8人』として三弥井書店より刊行した。

研究成果の概要(英文)：This project aimed at clarifying the reality of the women's education in the Meiji period. During the research period from 2010 to 2013 results is 1. Women's critical biography series concerning the education in the Meiji period, The Earth Kyoikushinsha, 2010. 2. "Epigraphs, War Narratives, and How to Write Letters: A Study on the Handbooks of Model Letters for Women in the Meiji period", Japanese Literature, July 2011, Vol. 60-7, No. 697. 3. "Biography of eight women in the Meiji Period" Miyai Bookstore, 2014.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：女性教育 明治 知 の継承 漢文 中世文学 女訓 評伝

1. 研究開始当初の背景

これまで、女性が習得すべき知識や教養、日常生活を営む上での心構えや振る舞い、さらには自己認識の問題などを記した女訓書というジャンルは、女性に向けての教訓書という位置付けから、その限定性、閉鎖性を思われ、文学研究では取り上げられる機会の稀な領域であった。わずかに女訓書の嚆矢とされる『にはのをしへ』が、作者とされる阿仏尼との関係から言及される程度であり、ジャンルそのものについての検討や、作品の紹介や注釈的作業、通史的な考察もほとんどなされてこなかった。

もちろん、近世期の往来物に関する研究を始めとして、作品のいくつかは教育史研究の場で取り上げられてはきたものの、各作品の世界そのものを問うことや、通史的な観点から、歴史的継承性、あるいは、変化の諸相を明らかにするまでには至っていない。

申請者は、科学研究費基盤 C (一般)「女訓書の研究」(2000 年度～2002 年度)の援助により、中世期に成立した代表的な女訓書であり、近世期にも読み継がれた『女訓抄』の本文校合を行い、これまで知られていなかった徳国文庫本を翻刻し解説を付し、『伝承文学資料集成 女訓抄』(三弥井書店、2003 年)として紹介した。

その作業過程で、女性救済論とその展開、なかでも、南北朝から室町にかけて浄土宗や浄土真宗で説き始められた女人正機説が『女訓抄』の思想的背景にあることを明らかにした。同時に、日本の説話はもとより、孝子伝や烈女伝、『荆楚歳時記』など中国文学とその受容に関わる『和漢朗詠集』注の世界、『伊勢物語』に代表される中世の注釈世界、養生や衛生といった医学的知識、暦や年中行事に関する節用集や雑書的知識など、『女訓抄』の学際的世界を知るに至り、その諸相の一端を明らかにした。

こうした中世的女訓書の世界を明らかにする一方、かねてからの研究対象でもあった軍記物語のひとつである『源平盛衰記』の作品世界と、その受容と再生の諸相を、近代までを視野に入れ、たどるなかで、そこに女訓的要素のあること、さらにそれが、中・近世から近代に至る女性教育の場で利用されてきた事例を知った。

そこで、科学研究費基盤 C (一般)「女訓書の研究」(2000 年度～2002 年度)の援助により、『中世の文学 源平盛衰記(六)』(共著者：美濃部重克、2001 年、三弥井書店)を発表するとともに、明治期の女性教育における軍記物語の受容について、とくに落合直文を中心とする「国文学者」たちの営為から考察する研究論文を発表し、学制と徴兵制により、日本の近代が軍事国家として始発したこと、およびそうした国家体制下の教育の問題を考えるに至った。

さらに、女訓の世界を中世の 知 の世界において捉える作業のひとつとして、『月庵

醉醒記』の輪読会に参加し、担当箇所(注釈)を通じて、中世期の 知 の諸相を考える機会を得た。その成果は、科学研究費基盤 C (一般)「中世にみる女性教育と基礎教養の研究」(2004 年度～2006 年度)の援助を受けた『中世の文学 月庵醉醒記(上)』(三弥井書店、2007 年)、科学研究費基盤 C (一般)「中世女訓書と 知 の継承に関する研究」(2007 年度～2009 年度)の援助を受けた『中世の文学 月庵醉醒記(中)』(三弥井書店、2008 年)によりすでに発表した。

なかでも申請者は、『仮名教訓』系女訓書「御文十箇条」の注釈作業を通して、武家と公家の文化的位相を問うとともに、諸本収集の過程で、室町末期の成立時から、近世、そして近代へと、連綿と続く『仮名教訓』系女訓書の受容史を知るに及んだ。それは、「女訓と習字手本とを兼ねた教科書」(石川松太郎)としての、本作品の性格によるものである。いっぽう、明治初期にあっては、美子皇后と福羽美静に代表される侍講たち、跡見花隠に代表される女性知識人たちによる教育的営為によるものでもあった。

そこで今回、明治期を対象とし、教材や読み物、表象をも含めた資料により、中世女訓書の世界から継承された 知 の諸相の変容と再生を明らかにするとともに、日本の近代化によって創造された女性教育の内実と教育的営為を問うこととした。

2. 研究の目的

女性教育を 知 の継承という観点から捉え、社会文化史、政治思想史における「女訓」という歴史的視座の有効性を考えるとともに、明治期に行われた「女性教育の内実」と「教育という営為」を、天皇・皇后側近、政府首脳、民間、三者のありかたと、彼らが編纂した教材・読み物・表象により明らかにすることである。

3. 研究の方法

これまでの科研費研究の成果をもとに、近世末から明治期にかけて流通した女訓書を整理し、そこに見られる継承性と近代化による新たな要素を析出する。

(1) 福羽美静・元田永孚ら侍講による教育活動について、その内容の調査考察を進める。

(2) 『仮名教訓』系の女訓書である『からすまる帖』の受容から、教育カリキュラムの中での習字に注目し、女訓との関連からその様態を考える。

(3) 美子皇后をはじめとする皇族、華族との強い結びつきを背景に、私立の女学校として成功をおさめた跡見女学校と創設者・跡見花隠に注目し、明治初期の女性の教養について、階層と継承性両面から明らかにする。

(4) 『伝承文学全注釈叢書(第 1 期)女訓抄』と『中世の文学 月庵醉醒記』(いずれも三弥井書店)の編集作業と連動させる形で、中世 知 が、近世～近代においていかなる面で

継承されているかを明らかにする。

(5)学習の基盤のひとつである漢文に注目し、とくに武家の娘たちによる「知」の継承と受容の諸相を、女性教育史の観点から考える。

4. 研究成果

(1)『文部科学教育通信』誌上で連載を開始した「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」において、明治という時代に、学ぶことによって自らの可能性と人生とを切り開こうとした女性たちの姿を、とくに漢学との関わりから明らかにした。

具体的には、明治期の女性教育において主導的役割を果たした美子皇后、皇族・華族との繋がりを活かしつつ私立学校を創設した跡見花蹊、福岡の地で、頭山満ら後に政治結社（玄洋社）を設立する若者たちを教え鍛えた高場乱、殖産興業・富国強兵を掲げた明治政府が、外貨獲得と欧米の先進技術導入のために設立した富岡製糸場で工女として働き、その記録を残した和田英、結婚によりアメリカに渡り、夫亡き後、コロンビア大学で講師として日本文化を教えた杉本鉞子を取り上げた。

(2)明治期に多く作られた女性向け書簡文範のひとつで、樋口一葉晩年の作として広く読まれた『通俗書簡文』を取り上げ、一葉による本文と、それとは別に設けられた鼈頭とにより創造された書簡文範という世界と、そこに惹かれた中世軍記物語の存在および果たした役割から、近代における中世文学再生の意味を、戦時下の女性像という観点から論じた。

(3)明治天皇の侍講で、美子皇后にも仕えた福羽美静による女性向け韻文教育について、中世末から近世期にかけて多く作られたいは歌をはじめとする道歌の世界と、その教訓性を受け継ぐかたちで福羽が実践した韻文の反復愛唱の事例を紹介し、その有効性を論じた。

(4) (1)に大幅な加筆を行うとともに、新たに1名を加え、『烈女伝 勇気をくれる明治の8人』として三弥井書店より刊行した。

同書では、内容理解に役立つ約70点に及ぶ図版資料を掲載し、平易な表現を用いることで、若い世代にとっての読みやすさを心がけた。内容は以下の通りである。

「偉人伝を超えて はじめに」、第一章「学びたい!をあきらめない 東京女子師範学校第一回生 青山千世」、第二章「明治新政府にもの申す 皇后の家庭教師 若江薫子」、コラム「女性と手紙 樋口一葉のかくれたベストセラー『通俗書簡文』」、第三章「近代女性の『鑑』となる 宮中のたましい 美子皇后」、第四章「学校経営に戦略を! 跡見女学校創設者 跡見花蹊」、コラム「女訓書の系譜 秋篠宮紀子さんに贈られた『からすまる帖』」、第五章「荒くれ反骨男たちを鍛える 興志塾塾頭 高場乱」、第六章「殖産興業を担う 富岡

製糸場工女 和田英」、コラム「海外に紹介された少女 ちりめん本の世界」、第七章「日米文化の架け橋となる コロンビア大学講師 杉本鉞子」、第八章「大胆に率直に自己の意志を示す 初代婦人少年局長 山川菊栄」、「手渡されたメッセージ 結びにかえて」。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 11 件)

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(5)美子皇后」、『文部科学教育通信』、査読無、第241巻、2010年、22頁-23頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(6)美子皇后」、『文部科学教育通信』、査読無、第242巻、2010年、22頁-23頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(7)跡見花蹊」、『文部科学教育通信』、査読無、第243巻、2010年、22頁-23頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(8)跡見花蹊」、『文部科学教育通信』、査読無、第244巻、2010年、30頁-31頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(9)高場乱」、『文部科学教育通信』、査読無、第245巻、2010年、30頁-31頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(10)高場乱」、『文部科学教育通信』、査読無、第246巻、2010年、30頁-31頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(11)和田英」、『文部科学教育通信』、査読無、第247巻、2010年、30頁-31頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(12)和田英」、『文部科学教育通信』、査読無、第248巻、2010年、30頁-31頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(13)杉本鉞子」、『文部科学教育通信』、査読無、第249巻、2010年、26頁-27頁

榊原千鶴、「知」の継承から考える明治期の女性教育「先駆者の気概に学ぶ」(14)杉本鉞子」、『文部科学教育通信』、査読無、第250巻、2010年、22頁-23頁

榊原千鶴、「女子用書簡文範の鼈頭と軍記物語『通俗書簡文』を手がかりとして」、『日本文学』、査読有、第6巻第7号、2011年、44頁-52頁

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 2 件)

服部幸造、弓削繁、辻本裕成、小林幸夫、藤井奈都子、小助川元太、佐々木雷太、徳竹由明、日沖敦子、榊原千鶴、二本松泰子、徳田和夫、三弥井書店、『中世 知 の再生』『月庵酔醒記』論考と索引』、2012年、423頁
榊原千鶴、三弥井書店、『烈女伝 勇気をくれる明治の8人』、2014年、223頁

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榊原千鶴 (sakakibara chizuru)
名古屋大学・男女共同参画室・准教授
研究者番号：50313979

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：